

竊かに愚案を回らして、ほぼ古今を勘うるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思うに、幸いに有縁の知識によらずは、いかでか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟をもって、他力の宗旨を乱ること莫れ。よって、故親鸞聖人御物語の趣、耳の底に留まるところ、いささかこれをしるす。ひとえに同心行者の不審を散ぜんがためなりと云々

第17組 幸福寺住職

楠 信生

text by Shinshou Kusunoki

前序「歎異を知らず」

『歎異抄』は「先師の口伝の真信に異なることを歎き」編集されたものであります。「異なることを歎き」といっても、ただため息をつくように歎いているわけではありません。编者・唯円にとって「先師の口伝の真信」「有縁の知識」「故親鸞聖人御物語の趣」と語るどころには、遇い難くして遇うことのできた「浄土の真宗」が現に生きているわけであります。その意味で、『歎異抄』編集の意趣について、金子大榮先生は『歎異抄—現代を生きるこころ—』（朝日新聞社1973年）の中で

帰依とは死の帰するところを生の依るところとするものである。その帰依の心が阿弥陀に向かえば念仏であり、浄土に向かえば往生となる。こうして念仏往生を願う、それが『歎異抄』の宗教であり、親鸞の人生観である

(五九頁)

と語られます。

帰依の心、つまり信心と念仏そして念仏往生ということが『歎異抄』の中心的課題であり、それについての親鸞聖人の言葉が、教えとして唯円の耳の底に留まっているのです。

「耳の底に留まる所」ということについて、廣瀬杲先生の指摘に教えられます。

歎異するのは、歎異抄の作者が他の人を歎異するに先立って、歎異されたという身に覚えがあったということなのですね。自分が宗教を間違っていた、自分が信仰を誤って了解していた。それを親鸞聖人によって厳しく指摘され、

そして悲しまれた、と。言うならばお師匠様にずいぶんご迷惑をかけました、という実感をもって聞き取った言葉が、特に忘れようにも忘れることのできない十の言葉として、ここに収められているわけでしょう。

(『歎異抄の心を語る』二三四頁)

私たちは宗教や信仰についての無知、そして多少学んで知っているつもりでも誤解や思い込みを待っており、それを指摘されると恥ずかしく感じたり不快に思ったりします。それだけに、私たちの記憶は、そのような経験をすることによってより深く記憶に残るのであります。

唯円にとって耳の底に残り、忘れることのできない「十の言葉」(『歎異抄』第一章～第十章)との出遇いは、それだけ念仏の信心についての聞き方・了解の不備を教えられる縁があったということでありましょう。聞き方・了解の不備とは、聞き方・了解に「とらわれ(執)」があったということであり、「とらわれ」は自己を閉ざすものであります。とらわれた自己を気づかせ、自己を開く親鸞聖人の言葉は、大切な教えとして唯円の念仏生活を導き、さらに「後学相続の疑惑あることを思うに、幸いに有縁の知識によらずは」という使命をも呼び起こしていったのであります。

「十の言葉」は、念仏の信ということで一貫しております。「先師の口伝」「故親鸞聖人御物語の趣」の内容、つまり浄土の真宗は、念仏の信心が要であるということを伝えるものであります。そしてその信がどこから起こるのかということについて曾我最深先生は、

新しい真宗学、時代相応の教学の問題は、欲生我国をあきらかにするにある。真宗の中心は欲生我国にある。欲生があきらかになれば、真宗学はあきらかになる。(中略)至信信楽は欲生にはじまる。欲生は浄土門のはじまりである。如来の本願のはじまりである。われらの信心も欲生にはじまる。

(『歎異抄聴記』真宗文庫三四頁)

と教示くださっています。先月号において真宗同朋会運動は歎異の精神であると申し上げましたが、「如来の欲生心に聞く」という点において、これまでの運動の展開がどうであったのかと考えさせられます。「歎異されている」ことを忘れ、「先師の口伝の真信に異なることを歎」くことを知らなかった年月ではなかったのかと。